

# 日常会話における否定的評価のストラテジー

高宮 優実

## 1. はじめに

非難する、<sup>けな</sup>貶す、咎める、批判する、叱責するといった、否定的な評価を行う行為は、相手の面子を傷つける恐れがあるため、配慮をしながら行わないと、相手との間に対立を引き起こし、人間関係を壊してしまう恐れがある。本稿では、日常会話において、人が相手との良好な人間関係を保ちつつ、自分の否定的な評価を表明するために用いるコミュニケーション上のストラテジーについて、実際の会話データから考察を試みる。

## 2. 先行研究

Brown & Levinson (1987) は、人間誰もが持っている普遍的な願望として「フェイス (face)」という概念を提唱している。フェイスは、他者に理解・共感され、好ましく思われたいという連帯願望であるポジティブ・フェイスと、他者に邪魔されたくない、侵害されたくないという独立願望であるネガティブ・フェイスの2つの側面を持つ。人は、コミュニケーションにおいて、常に相手との関係性のバランスを保ち、お互いのフェイスに配慮をしながら、これらの願望を満たしたり、脅かしたりする行為を行っている。この配慮の行動についての理論は、ポライトネス理論と呼ばれる。いかに相手のフェイスを尊重しようとも、実際にはほぼすべての発話はお互いのフェイスを侵害する可能性である「フェイス・リスク (face risk)」を持っていると言われる。お互いのフェイスを脅かす行為はフェイス侵害行為 (face threatening act: FTA) といわれ、FTA のフェイス・リスクの重さは、話し手と聞き手の社会的距離、話し手と聞き手の相対的力関係、その文化における行為の負荷の度合いの3つの要因の合計から算出することができる。Brown & Levinson (1987) は、フェイス・リスクを軽減するためのストラテジーを5つ挙げている。

1. あからさまに (baldly)
2. ポジティブ・ポライトネス (positive politeness) (相手のポジティブ・フェイスへの配慮)
3. ネガティブ・ポライトネス (negative politeness) (相手のネガティブ・フェイスへの配慮)
4. ほのめかす (off record)
5. FTA をしない (Don't do the FTA)

フェイス・リスクが小さければ1のあからさまな表現が、大きければ5のFTA回避が選ばれることになる。

非難するといった否定的評価は、相手の他者に認められたいという欲求であるポジティブ・フェイスを脅かす。また、非難された相手はその非難に対して反論する場合には、相手の立ち入られたくないという欲求も侵害するため、ネガティブ・フェイスも脅かす可能性がある。実際の会話では、これらFTAの重さを軽減するために、様々なストラテジーが使われているはずである。

これまで、相手のポジティブ・フェイスを満たす行動である日本語のほめに関する研究は多く行われている (Barnlund & Araki 1985, Daikuhara 1986, 熊取谷1989, 田辺1996, 日向1996, Saito & Beecken 1997, 古川2000, 2001, 2002, 2003, 金2005, 2007など)。ほめ言葉に関しては一般書も多く出版されていることから、注目度が高いことがうかがわれる。例えば、『口ベタでもうまくいく! ほめかたの極意』『決定版 ほめ言葉ハンドブック』といった本では、相手や状況にあわせて、どのようにほめればいいのかの説明されている。しかし、その反対については、特に子育てに関する「叱り方」「しつけ方」といった類の分野では見られるものの、一般的にはあまり見られない。このように、肯定的評価の代表であるほめに関しては認知度が高いのだが、その反対となる否定的評価に関しては認知度が低く、研究も盛んには行われていない。否定的評価を含む発話がどのようなきっかけで発せられているかを調べた関崎 (2010) は、80%の場合は、相手からの発話や動作などの結果として発せられており、相手との相互作用が重要な要因となっていることを明ら

かにした。関崎（2010）の研究では、相互作用の中でのきっかけに応じて、批判や非難、不同意など、相手のポジティブ・フェイスを脅かすものと、冗談への応答、バックチャネル、助言など相手のポジティブ・フェイスを満たすものが観察された。さらに、日本語・韓国語母語話者の親しい友人同士が、会話の中でどのように否定的評価を行っているかを分析した林（2015）は、日本語では、聞き手が自らの非を先に述べ、話し手がそれに同調することで否定的評価を行うことが多いことを明らかにした。また、話し手は、相手に否定的評価を行った後に、自身がへりくだることで、相手の領域にはそれ以上踏み込まないことを示し、相手のネガティブ・フェイスを補償していることがわかった。しかし、これらの研究で分析に用いた会話は、予め話題が設定されており、完全に自然な状況で自発的に発せられたものではない。そこで、日常生活における会話の中で、我々はどのように否定的な評価を行っているのか、評価を行った側、受け取った側双方の発話について、自然談話の資料を用いて分析を行うことにする。

### 3. 研究目的と方法

#### 3.1 否定的評価の定義

否定的評価とは、ほめを代表とする肯定的評価の反対となるものであるが、この定義について、関崎（2010）は、否定的評価の意味を持った語彙・表現を含む明示的なもの、あるいはそういった語彙・表現は含まないものの、相手に対する批判、非難、不同意、注意等の機能を持った発話としている。

関崎（2010）が挙げたもの以外でも、ほめの対義となる表現には、「不平」「不満」「非難」「叱責」「責め」「侮辱」「脅し」「罵り」「誇り」「貶し」など、広義には多くの意味合いが含まれる。本研究では、このような、ほめとは逆の機能を持ち、聞き手のフェイスを脅かし、相手との良好な関係性を壊す恐れがある表現全般を対象とする<sup>(1)</sup>。

なお、不満表明に関する研究では、会話に参加していない第三者について不満を表明する場合も含まれるが（Boxer 1993a, 1993b）、本稿でも、相手について直接言及するものと、第三者について言及するもの両者を含むこととする。

### 3.2 研究の課題

本稿の具体的な研究の課題は以下のとおりである。

研究課題1：実際の会話の中で、否定的評価はどのような状況で出現し、どのようなストラテジーを用いて相手に伝えているかを明らかにする。

研究課題2：研究課題1で使われたストラテジーが人間関係に影響を及ぼしているかを考察する。

### 3.3 研究方法

『談話資料 日常生活のことば』に収録されている会話データを分析の対象とした。ここでは、20代から70代までの広い年代層の男女が日常生活の雑談を中心として行った自然談話が収録されている。このデータの中で、3.1で定義した否定的評価が行われた場面を抽出し、どのような状況下で発話されたかの詳細と、使用されたストラテジーを、会話分析の手法を用いて検証した。

## 4. 結果と考察

### 4.1 相手に対する直接的な発話

ここではまず、非難が相手に対して直接向けられている発話について観察する。

ストラテジー1：役割上、目下から目上への直接的な叱責が大きなFTAとまらない場合がある。

会話1は、20代の娘が50代の父親と母親と共に食事をしながら雑談している場面で行われた会話である。この会話では、娘が父親に対し、非常にストレートに叱責している場面が見られる。通常、力関係に大きな差のある親子関係では、子から親に対して、大きなFTAを行うことは避けられると考えられる。しかし、ここでは、子から親への叱責が、大きなFTAとはみなされていないことが観察される。

## 【会話1】

- 1 父：これの、皿。  
→2 娘：返さなきゃいけないよ。  
3 父：うん。  
→4 娘：当たり前ですよ。  
5 父：プハン（咳き込む）。  
→6 娘：何か言いなよ、半分とか、お代わりとか。  
7 父：一杯。  
    <中略>  
→8 娘：「ごちそうさま」は？  
9 父：ごちそうさま。

この会話では、2行目で、お代わりしたいなら、今使っている皿を、お代わりをよそう人である自分に手渡すべきだという、あたかも親が小さな子どもに対してしつけを行っているような場面で見られる忠告が、逆に娘から父親に対して行われている。そうすることは常識だということを、4行目では「ですよ」と丁寧体を使って改まった口調で述べているのだが、Cook (2008) は、姿勢を正す、プレゼンテーションをしているというような場面で、このような普通体を基調とした会話に丁寧体が出現するとしている。Cook (2008) の例では、ホストマザーが、夕飯の席で、ホームステイをしている学生に対して指導的立場をとるときに丁寧体が使われる様子が見られたが、ここでは、父親ではなく、娘が指導的立場をとって、「です」を使っている。その後、6行目の父親にご飯のお代わりをよそってあげることを提案する場面で「何か言いなよ、半分とか、お代わりとか。」と命令し、非常に強い口調で叱責している。同様の例は食事が終了し、8行目で『「ごちそうさま」は?』と食後の挨拶を父親に強要する場面にも見られる。この会話では母親も同席しているものの、実際には娘が食卓における母親の役割を担っているために、こういった話し方をしていると考えられる。このような特異な話し方であるにも関わらず、父親の受け答えは穏やかで、親としての面子が脅か

されているようには見受けられない。通常、親子であれば親が、兄弟であれば年上の兄や姉が、パワー・権限を持って物事を遂行しているように捉えられがちだが、社会の構造が変わり、家族間の関係も場面に応じてダイナミックに変化するようになり、役割にあわせた話し方が選択されていることが考えられる。つまり、娘が母親的な役割を担っている場面においては、父親に対してこのようなあからさまな FTA が行われても、それほど相手のフェイスを侵害することがないということがいえる。実際、上記の会話以外の場面で、違うトピックについて話している際には、このような際立って大きな FTA は見られない。娘が母親の役割を担い、父親が子どもの役割を担うという、その場限りのお互いの役割分担を認識している間柄では、こういった直接的な叱責が相手との関係性を壊さずに行われることが明らかになった。

ストラテジー 2：「遊び」としての対立が起きている場面では、理不尽な命令や非難は冗談と受け取られ、ポジティブ・ボライトネスとして機能する。

会話 2 は、40代夫婦が話しているものである。この夫婦は共働きであり、来月、自身には出張の予定がない妻が、夫に対して遠くに出張に行ってほしいという願望を持っていることを述べている。それに対して、夫は自宅の近くの関東で十分だという返事をしたため、妻は乱暴な言葉遣いで不満をぶつけている。この会話は、夫婦間で行われており、親疎の関係は近く、力関係にも差がないが、出張先という夫が自分の意思では決定できない件について、同じく決定権を持たない妻が命令をすることで、夫にかかる負担が大きい。そのため、妻の荒い言葉遣いは大きな FTA となることが予測されるが、この会話では特に相手のフェイスが傷つけられたという様子が見られない。

## 【会話 2】

- 1 夫：1月は出張ないの、<妻の名前>は。  
→2 妻：ない。ないから<夫の名前>に遠くに出張に行ってもらいたい。

- 3 遊びに行くから (笑)、遠くでありますように。
- 4 夫：俺は、関東でいいなあ。
- 5 妻：何でだよー。<地名>にしてくれよ。
- 6 夫：だって、関東だったら、土日帰って来られるから。
- 7 妻：(笑) 関東ってどの辺？

妻は、夫に出張予定がないのかを聞かれ、「ない」と2行目で緩和表現や終助詞を伴うことなく、明確に否定し、さらに夫に遠くに出張に行ってほしいという願望を、「行ってもらいたい」と、終助詞等を使わず、率直に伝えている。それに対して、夫は近場の関東で十分だと返すのだが、5行目で妻は「何でだよー。<地名>にしてくれよ。」と、夫を非難し、遠い場所を勝手に指定して、命令口調で伝えている。ここでは、男言葉が使われているため、極めて乱暴で無礼な命令の仕方となっている。しかし、実際には出張の行き先を選ぶ権利は、夫自身にもなければ、ましてや妻にはないことは妻自身もわかっているため、これは非常に理不尽な要求である。このような、理不尽な要求を、男言葉といった乱暴な話し方で行った場合、通常であれば、相手のネガティブ・フェイスを脅かすものとなるはずだが、夫はそれより前に自分の発した質問の続きを淡々と行っており、特にフェイスが脅かされている様子は見られない。これは、妻の発話を夫は冗談として受け取り、真に受けていないからだと考えられる。Brown & Levinson (1987) はポジティブ・ボライトネスの1つとして冗談を挙げ、冗談として相手と対立するのであれば、乱暴な物言いが、むしろ親密な関係を築く機能を持つと説明している。親しい友人同士の雑談中に現れる遊びとしての言い合いを分析した大津 (2004) は、遊びとしての対立を開始したい会話参加者が、わざと理不尽なことを言って「ボケ」て、相手が対立表明するよう仕向けることで、「冗談」としての対立を引き起こし、遊びとしての対立が開始するとしている。つまり、この会話でも、妻はわざと理不尽なことを言って、夫と遊びとしての対立を開始させようとしたのだろう。夫は妻の「ボケ」に反応し、反論し、遊びに加わるということにはなかったが、それが冗談であることを理解したため

に反論しなかったのであろう。「遊び」が発話の意図であるというメタメッセージを伝える合図の1つに、大津（2004：50）は、通常用いる話し方を一時的に変える「スタイル・スイッチング」を挙げ、例えば、くだけた話し方から急にフォーマルな話し方になるといった行為は、対立「ごっこ」を続けるための演技のひとつであるとしている。妻はこの会話中、一箇所だけ丁寧体を使っている。それは3行目の「遊びに行くから（笑）、遠くでありますように。」という部分なのだが、ここは自分の願望を独り言として述べている状況であり、相手への敬意から丁寧になったものではないと考えられる。このような箇所でのみ丁寧体を使うことは、他で直接相手に向けられた言葉の乱暴さがかえって際立つが、このようなあからさまな言い方であっても、会話のその後の進行を見ると、6行目や7行目では、何事もなかったかのような穏やかな質疑応答が行われていることから、FTAとはなっていないことがわかる。つまり、この突如現れる丁寧体によって、これは冗談としての対立行動だということが相手にわかりやすくなっているのである。さらに、大津（2004：51）は、非言語である笑いによっても、その会話が「遊び」だというメタメッセージが伝わるとしているが、この会話でも、「遊びに行くから」という自己中心的な理由を説明しながら、話者である妻本人が笑っている。この笑いも、「これは遊びだ」ということを相手に知らせるマーカーとなる。このように、話し方の変化や笑いといった、「遊び」を暗示するいくつかのメタメッセージが同時に現れると、この発話は「本物の対立ではない」ということが、相手には明確に伝わる。このことから、夫婦のような親しい間柄においては、あからさまな物言いや命令がFTAとならず、逆に、ポジティブ・ボライトネスとして働き、相手との親密さを増強させる役割を果たすということがいえるだろう。

#### 4.2 第三者に関する間接的な発話

ここでは、そこにいない第三者との間で行われた会話について説明する状況や<sup>(2)</sup>、否定的評価が向けられた相手には聞こえない状況といった、間接的な状況について考察する。



ストラテジー 3：相手に非を認めさせ行動を改めさせたい場合、親しい間柄でも婉曲な指摘である「ほのめかし」を用いると受け入れられやすい。

会話 3 は職場の同僚の40代女性 3 人 A、B、C が昼休みに食事をとりながら雑談をしている場面である。そのうちの C が、セールで買い物をして物が増えていくことを述べると、それに呼応して、B も同じ状況であることを述べ、自分に対して、夫がどのように非難するかについて話し、A も自分がどのように夫に責められるかを説明している。ここでは、ほのめかして忠告を受けた場合には反省の色が見られるが、直接的な非難をされた場合には、逆に反感を持つことが観察される。

### 【会話 3】

- 1 同僚 C：(セールで) どんどん安いものを買っているからどんどん増  
2 えてっちゃうから。  
→3 同僚 B：言われる、旦那に、「1 個買ったら、1 個は捨てようね」っ  
4 て(笑)。「うーん、土日ね、土日ね」とか言いながら  
5 (笑)。  
6 同僚 A：(笑)。  
→7 同僚 B：「また買ったの」、みたいな(笑いを含んだ声で)。  
8 同僚 A：ふうーん。  
9 同僚 B：ねえ、「だって安かったしー」みたいな。  
10 同僚 A：うんうんうん。  
11 同僚 C：でも、あんまり、でも、言いたくないっていう感じかな。  
→12 同僚 B：うん、そう。でもばれちゃって、「それ持ってなかったよね  
→13 え」みたいなね。「え、え、ばれた」(笑いを含んだ声で)。  
    <<中略>>  
14 同僚 A：そう、何か、いちいちね、「買ったの?」とかって言われる  
→15 と、だから何、みたいな(笑いながら)。  
16 同僚 B：そうそうそう、文句あるのって(笑いを含んだ声で)。

→17 同僚A：あなたのお金使ってないよ、一銭も、みたいな（笑いながら）。

Bは夫から「1個買ったら、1個は捨てようね」と、母親が小さい子どもをたしなめるような明示的な口調で非難されると述べている。「～しようね」という言い方は、「～しなさい」という一方的な命令口調の指示とは違って、「一緒に～しよう」という誘いかけの意味合いがある。そのため、親が子にルールを説明する際に、「これはルールなのだから従おう」と呼びかけ、説得するストラテジーとしてよく使われる。つまり夫は、妻に対して、暗に自分も同様にそのルールに従うのだという姿勢を見せ、配慮を示しながら、相手にも従ってほしいと忠告していることがうかがわれる。しかし、妻は素直には従わず、週末に処分すると、対応を先延ばしにして解決を図ろうとすると述べている。さらに妻の物が増えると、夫は、「また買ったの」と、無駄な買い物が多いことを強調し、最初の段階よりも強い口調で非難するようになる。すると、初めは物を減らそうと相手に歩み寄った解決策を述べていた妻も、夫のお金は使っていないのに文句があるのかと反感を持つようになると述べている。聞き手であるAもそれに同調し、いちいち買ったのかと確認されると、「あなたのお金使ってないよ、一銭も」と笑いながらも自身の非難を伝えると述べている。物が増え、捨てられない妻に対して、相手の反感を買わずにどう忠告するのか、夫は効果的なストラテジーをなかなか見つけられずにいることがわかる。冒頭の、「1個買ったら1個捨てよう」は、買ってあげた母親が子どもに言う際には説得力があるものの、働いている妻の場合は金銭的に夫に対して負い目がないため、むしろ妻にとっては自分で買ったものを処分するよう指示されるという癢に障る言い方となり、相手のフェイスを侵害することになっていると考えられる。会話の中では、「それ持ってなかったよねえ」とほのめかすストラテジーを使った場合には、相手に対するフェイス・リスクも軽減され、話し手もFTAを行うことを避けることができ、双方の関係性にとって良好な作用をしている。夫の直接的な言い方は、妻たちから反感を買うばかりであるが、ほのめかして言われた場合

は、妻も「ばれた？」と非を認め、反省の色を見せている。そのような方向性に持っていくためには、評価の際には事実をさりげなく述べ、相手を責めるような質問口調ではないほうが効果的であると考えられる。この会話は、妻たちが夫に責められる際の会話を笑い話として自虐的に紹介していることから、夫と妻の間には特に人間関係に影響がなかったことがうかがわれる。

ストラテジー 4：アイロニーなどのほのめかしを使った非難は、相手に意図が伝わらないこともある。

会話 4 は30代の大学教員である女性が、50代の大学で音楽を教える男性の友人と、レストランで食事をしながら、仕事について雑談している場面である。50代の男性音楽教師が、事情により代理の教師に授業を頼んだときに、その代理の教師が琴をクラスで紹介し、学生から非常に好評だったということ、30代の女性教師に話している。学生たちが、代理の教師の授業をほめるので、本来の教師である自分の授業はおもしろくないのかと不満を表している。ここでは、教師、学生ともに「ほのめかし」を使って相手を非難しているが、相手に意図が伝わっていないことが観察される。

#### 【会話 4】

- 1 男性教員：すごい、あの、あれ、今までで一番おもしろかったって言  
2 ってる。  
3 女性教員：ええ、本当？  
→ 4 男性教員：うーん、「じゃ僕の今までの授業は何だったの？」とかっ  
→ 5 て聞くと「いや、それはそれで」みたいな（笑）。  
6 女性教員：やばい、みたいな（笑）。  
7 男性教員：そうそうそう（笑いながら）。  
8 女性教員：「フォローしなきゃあ」みたいな（笑）。  
→ 9 男性教員：それ言った後にもものすごいさー、「ほんとにおもしろかつ  
→ 10 った、今までの授業で一番おもしろい、これが」とかっ

- 11                    と言って。
- 12                    まあ僕はその、頼んだ先生がやってたわけだから、
- 13                  「へえー、じゃ今までののは全然おもしろくなかったんだ
- 14                  ー」(笑)とか言って、「いや、それはそれでー」みたい
- 15                    な(笑)。

1行目の「今までで一番おもしろかった」という発話で、代理教師の琴の授業に対する学生からの評判が非常に高いということを知った本来の担当教師である男性教師は、素直に「おもしろい授業でよかったね」と言って、代理教師が上手な授業をしてくれたことに謝意を示し、学生の高評価に同調し、肯定的なことを言うこともできたかもしれない。場合によっては、学生が気を遣って、男性教師についても肯定的な評価を付け加える余地があったかもしれない。しかし、代理教師の授業が一番ということは、間接的に自分の授業は二番以下であるという意味にもとれることに腹を立て、男性教師は、4行目で、「今までの授業は何だったの？(おもしろくなかったの?)」と咎めたと、女性教師に説明している。この非難には、自分の授業もほめてほしいという含意があるが、それは学生には伝わっていない。そのため、「教師が怒っている」という印象だけを受け取った学生は「それはそれで(おもしろい)」と答えたと報告している。おそらく、学生は、それ以上追及してほしくないということをこの表現でほのめかしているであろう。しかし、これでは、「それもおもしろくないわけではないが、代理教師の授業はもつとおもしろかった」という意味にも受け取れるため、評価の序列は変わらず、男性教師には学生の「教師の授業については触れたくない」という含意が伝わらない。男性教師は不満の気持ちを学生にぶつけたわけだが、学生はそれを意に介さないかのように、輪をかけて、エスカレートした表現で、10行目で今までの授業で一番おもしろかったと強調している。学生は先ほど男性教師の授業もおもしろくないわけではなかったと弁解したにも関わらず、さらに代理教師の授業をほめるので、これに対して、男性教師は、対比を際立たせるかのように「全然おもしろくなかったんだ」と念押しするような反論を

したことを伝えている。これも、相手に対する自分の授業もほめてほしいという「ほのめかし」である。すると、学生は5行目と同じ反応を語尾を伸ばして14行目で「それはそれでー」としつこさに嫌気がさしているような言い方で反応している。つまり、最後まで男性教師の「ほのめかし」は学生には伝わっていないのである。この会話例では、この教師は卑屈な態度で不満を伝えているため、学生もなだめるために、心にもないお世辞を言うしかないような状況になっている。この学生の言い方は、相手の発言に対して表面的に同意するオフ・レコードとしての使い方である。しかし、このほのめかしも、相手である教師には伝わっていない。実際には、自分の授業に対する肯定的な評価を引き出したいのであれば、他の言い方をしたほうが目的を達成する上で効果的であったのではないだろうか。例えば、自分も代理教師のような学生におもしろいと思ってもらえる授業をしたいが、どのような内容の授業をしてほしいか、学生から具体的に引き出せるようなコメントの仕方をすれば、また別の授業に対する評価も引き出せた可能性がある。卑屈な姿勢を見せて無理やり「あなたの授業も悪くはない」と言わせるよりも、相手にほのめかしの意図をより明確に伝えるストラテジーが他にあったのではないかと思わせる例である。この会話では、教師が笑い話としてエピソードを同僚教師に紹介していることから、特に教師と学生間の人間関係には影響がなかったことがうかがわれる。

**ストラテジー5：相手が第三者を非難している際に、その相手を直接的、間接的に批判しても、真意が理解されないことがある。**

会話5は、会話2の直前に行われた、40代の夫婦の会話である。妻は、自身が運転する車中で夫と雑談をしている際に、渋滞を引き起こしている車に対して文句を言っているのだが、理不尽な不満表明は、他人には見苦しいということ聞き手である夫が指摘している。相手が第三者に対して不平・不満を述べている際に、聞き手がそれに同調することは、話し手と聞き手の間の連帯関係を強めるといわれるが (Boxer & Pickering 1995)、ここでは夫は

妻に同調せず、反論している。まわりの車を運転している人たちやナビにまで八つ当たりし始めるため、夫がさらに反論しているが、妻には批判として伝わっていない。

### 【会話5】

→1 妻：このへったくそな車が、軽がいるときさ。

→2 夫：で、この車も、へったくそだよ（笑いながら）（笑）。

3 妻：へったくそな車がいるから止まっちゃうんだよ。

〈中略〉

→4 妻：これで混んでるってこと？みんなどこへ行くんだよって感

5 じだね。（間にナビの声）渋滞回避。

〈中略〉

→6 夫：一緒じゃん。変わんない、一緒だよ。

〈沈黙1分19秒〉

1行目で、妻は目の前を走る軽自動車の運転手の運転の下手さを非難し、それが渋滞を引き起こしているのだと糾弾するものの、夫は、妻の運転のレベルもかわらないことを、妻が使った「へったくそ」という表現を2行目でそのまま用いて、「この（妻の）車（の運転）も、へったくそ」と返している。妻のFTAの対象は他の車であり、第三者なのだが、夫のFTAの対象は明確に妻であり、「揚げ足取り」のような形での非難と捉えられそうであるが、その後も妻の不満表明が変わらず続くことを見ると、特に大きなコミュニケーション上の問題は起きていないと考えられる。大津（2004：51）は、笑いという非言語による合図によって、「これは遊びだ。」というメタメッセージが送られるとしているが、2行目では夫が笑いながら妻を非難していることから、妻は夫の発話を単なる冗談だと認識した可能性がある。妻は、自分も笑って冗談に興ずるということではなかったが、夫の「遊び」という間接的な形をとった批判を真に受けなかったことは、その後も第三者への批判を続ける態度から明らかである。妻が自分の運転の下手さを柵にあげて、他人の

運転の仕方を非難しているため、夫もそのような理不尽な愚痴には共感を示さず、妻に他の車を咎めるような資質はないと忠告しているのだが、妻は意に介さず、さらに4行目で、こんなに混んでいる中、みんなどこへ行くのだろうか（どこにも行かなければいいのに）と、渋滞への苛立ちを見せる。

妻を含め、まわりで運転している誰もに行き先を自由に選ぶ権利があり、また、実際には車外の誰もこの会話を耳にすることはないと考えると、この非難は現実には意味をなさない。その後、妻は、無理にナビを駆使して渋滞を回避しようとするのだが、そのようなことをしても、目的地に到着するまでの時間に大差はないからやめるべきだと6行目で夫は明確に批判している。しかし、その後1分以上にわたり沈黙が続くことから、夫の明確な批判を受けても、妻の姿勢にははっきりとした変化が見られなかったことがわかる。夫の6行目に見られるようなポライトネスを使わない発話行為は相手との人間関係を壊すと考えられるが（Leech 2016）、沈黙後の会話も淡々と続いており、特に人間関係に影響はなかったと思われる。

以上のように、夫の2行目で笑いながらなされた発話は、遊びという形をとりながらも、相手を現実に批判するものであったと捉えられるが、妻はそれを冗談と受け取り、夫の真意を無視して、自己中心的な他者批判を続けている。そして、6行目のように、笑いを伴わず、遊びの形をとらない明確な反論に対しても、妻は自らの態度を改めない。このような、妻の第三者に対する自己中心的な不満表明は、夫のような身近な人、通常であれば常に味方であるべき存在の者からも同意が得られないことがわかるとともに、このような状況で相手が「遊び」という形や、より明確な形で非同意を表明し、反論しても、その意図やFTAは相手に伝わらず、無視され、相手の態度は改まらないことがわかる。

## 5. まとめ

本稿での分析の結果、日常生活における雑談では、以下のようなストラテジーが見られることが明らかになった。

ストラテジー 1：役割上、目下から目上への直接的な叱責が大きな FTA とならない場合がある。

ストラテジー 2：「遊び」としての対立が起きている場面では、理不尽な命令や非難は冗談と受け取られ、ポジティブ・ポライトネスとして機能する。

ストラテジー 3：相手に非を認めさせ行動を改めさせたい場合、親しい間柄でも婉曲な指摘である「ほのめかし」を用いると受け入れられやすい。

ストラテジー 4：アイロニーなどの「ほのめかし」を使った非難は、相手に意図が伝わらないこともある。

ストラテジー 5：相手が第三者を非難している際に、その相手を直接的、間接的に批判しても、真意が理解されないことがある。

ストラテジー 1 では、通常目下である子から目上である親への直接的な叱責は大きな FTA を引き起こすことが予測されるが、家族の形態が変わり、状況によっては子どもと親の役割が通常と逆転する場合もあることが明らかになった。ここでは、ご飯をよそうといった通常母親が行う役割を娘がしているため、母親がするような叱責を父親に向けて行っても、大きな FTA とならず、関係性を壊していないことがわかった。ストラテジー 2 では、女性が男性に対して男言葉を使ってあからさまに命令口調で責めるが、それが特に聞き手である夫のフェイスを脅かすことにはなっていないことが観察された。これは、話し方のスタイルシフトや笑いによって、「遊び」としての対立であることが明確であるためだと考えられる。夫婦という関係においては、このような遊びとしての対立という枠組みの中での乱暴な物言いが広く受け入れられており、それが人間関係を壊すことにはつながっていないことがわかる。ストラテジー 3 では、直接的に相手を非難した場合、反感ばかり買うことになっていたのが、「ほのめかし」の表現を使った場合は、受け入れられ、反省を促すことにつながっていた。そのため、親しい間柄でも、常に明確に直接的に非難するのではなく、ほのめかしたほうが相手の行動の改善につながり



やすいことがわかる。このようにストラテジー3は「ほのめかし」の効果が顕著に現れたが、ストラテジー4では逆に「ほのめかし」がうまく伝わらないこともあることが見られた。ストラテジー3との大きな違いは、ストラテジー3では妻たちは自分たちが批判されていることをはっきりわかっており、自分にも物を増やしていることへの負い目がある。しかし、ストラテジー4では、学生たちは、代理教師の授業がおもしろかったことを正直に述べているだけで、何も負い目がなく、落ち度があるとは思っていない。聞き手に発話の意図が伝わっていない場合、アイロニーなどのほのめかしは、効果がなことがわかる。最後に、ストラテジー5では、第三者に非難・批判を行っている際に、その相手に同調せず、冗談という間接的な形や、明確で直接的な形で反論しても、FTAとはならず無視されることがあることがわかった。

研究課題1の「実際の会話の中で、否定的評価はどのような状況で出現し、どのようなストラテジーを用いて相手に伝えているか」については、会話1と2では、親子間、夫婦間において、相手に対して、通常は避けられるような強い非難や、遊びとしての対立表明が行われていた。会話3、4、5については同僚間、夫婦間において、「ほのめかし」や、遊びとしての非難、あからさまな強い非難が見られた。

研究課題2では、「研究課題1で使われたストラテジーが人間関係に影響を及ぼしているか」について、その後の会話のやりとりから検証したが、通常では良好な人間関係を脅かすと考えられるあからさまな非難の行為が全く影響を及ぼしていなかったり、ほのめかしに効果があったり、逆に伝わっていないケースなどが観察された。いずれの例においても、特に人間関係に大きな影響は見られなかった。従来、日本語でのコミュニケーションは調和が重視されるといわれてきているが (Maynard 1986, メイナード1993, Watanabe 1990, 1993, Cook 1993)、実際には会話において対立は起きているものの、様々なストラテジーを駆使して関係性を壊さない工夫がなされていることが明らかになっている (高宮2012)。ここでも、一見対立を引き起こしそうな発話であっても、相手との関係性によっては、FTAを引き起こさず、その後の人間関係にも影響がないことがわかった。

## 6. おわりに

誰かを叱責する、非難する、不満を表明するといった行為は、直接相手のフェイスを脅かす行為のため、通常は避けたり、婉曲に伝えるストラテジーがとられる (Trosborg 1995)。しかし、今回分析対象とした『談話資料 日常生活のことば』の会話データでは、直接的、間接的に様々な形で相手に否定的評価を与える場面が観察された。そこでは、5つのストラテジーが観察され、特に人間関係を脅かしていないことが明らかになった。本稿では、親子、夫婦、同僚など、関係性が既に築かれている話者同士の会話のみが分析対象となっているが、初対面の者同士など、異なる関係性のグループにおける会話では、また違った結果が得られる可能性もある。今後は、さらに多様な会話データにあたり、否定的な評価を与えている場面をより多く観察し、使われているストラテジーや人間関係への影響を広く検証していく必要があるだろう。

### 注

- (1) 関崎 (2014) では、指示、注意・忠告等、否定的評価に基づいて何らかの行為を要求したり、相手の利益を願うものはデータとしていない。また、不満や不同意、相手による自己否定に同意することで、結果的に否定的評価を伝えている発話も、否定的評価を主導的に与える発話ではないため排除されている。本稿では上記のような発話も分析対象に含む。
- (2) 会話3は妻が夫の発話を、会話4は教師が学生の発話を、それぞれ伝聞の形で伝えているため、妻や教師が自分なりの解釈で相手の発話について表現しているとも捉えられる。実際に妻と夫、教師と学生が当事者同士として話した際の発話とは異なることも考えられ、その場合は分析結果も変わる可能性がある。

### 参考文献

- イムシウン  
林始恩 (2015) 「親和的關係における否定的評価の研究：日韓母語話者の言語行動の比較」筑波大学人文社会科学研究所博士論文
- 大津友美 (2004) 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス—「遊

- び」としての対立行動に注目して一』『社会言語科学』6-2 pp. 44-53 社会言語科学会
- 金庚芬 (2005) 「会話に見られる「ほめ」の対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』124 pp. 13-22 日本語教育学会
- 金庚芬 (2007) 「日本語と韓国語「ほめの談話」」『社会言語科学』10-1 pp. 18-32 社会言語科学会
- 熊取谷哲夫 (1989) 「日本語における褒めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』2 pp. 97-108 広島大学教育学部日本語教育学科
- 現代日本語研究会 遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編 (2016) 『談話資料 日常生活のことば』ひつじ書房
- 関崎博紀 (2010) 「日本語の会話における否定的評価の表現を含む発話の機能一発話のきっかけに注目して一」『筑波大学地域研究』31 pp. 45-64 筑波大学
- 関崎博紀 (2014) 「日本人大学生同士の会話における言語行動としての否定的評価の研究」筑波大学人文社会科学研究科博士論文
- 高宮優実 (2012) 「対立場面における会話のストラテジー」『ことば』33 pp. 85-101 現代日本語研究会
- 田辺洋二 (1996) 「ほめことばの日・英語比較」『日本語学』15-5 pp. 33-42 明治書院
- 谷口祥子 (2011) 『口ベタでもうまくいく! ほめかたの極意』講談社
- 日向ノエミア (1996) 「ほめことばの日伯比較一感謝とほめことば一」『日本語学』15-5 pp. 50-58 明治書院
- 古川由理子 (2000) 「「ほめ」の条件に関する一考察」『日本語・日本文化研究』10 pp. 117-130 大阪外国語大学日本語学科
- 古川由里子 (2001) 「言語機能導入への一試案一「ほめ」を中心に」『日本語・日本文化研究』11 pp. 57-72 大阪外国語大学日本語学科
- 古川由里子 (2002) 「「ほめ」の種類一受け手に直接関係しない「ほめ」を中心に」『日本語・日本文化研究』12 pp. 41-54 大阪外国語大学日本語学科
- 古川由里子 (2003) 「書き言葉データにおける<対者ほめ>の特徴一対人関係から見た「ほめ」の分析」『日本語教育』117 pp. 32-42 日本語教育学会

- 本間正人・祐川京子 (2013) 『ほめ言葉ハンドブック』 PHP 研究所
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- Barnlund, D. C. & S. Araki (1985) Intercultural Encounters The Management of Compliments by Japanese and Americans. *Journal of Cross-cultural Psychology*, 16(1), pp. 9–26.
- Boxer, D. (1993a) Complaints as Positive Strategies: What the Learner Needs to Know. *Tesol Quarterly*, 27 (2), pp. 277–299.
- Boxer, D. (1993b) Social Distance and Speech Behavior: The Case of Indirect Complaints. *Journal of Pragmatics*, 19(2), pp. 103–125.
- Boxer, D. & L. Pickering (1995) Problems in the Presentation of Speech Acts in ELT Materials: The Case of Complaints. *ELT Journal*, 49 (1), pp. 44–58.
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cook, H. M. (1993) The Sentence-final Particle Ne as a Tool for Cooperation in Japanese Conversation. In Hoji, H. (ed.), *Japanese/Korean Linguistics*, 1. pp. 19–38. Stanford: Stanford Linguistics Association.
- Cook, H. M. (2008) *Socializing Identities through Speech Style: Learners of Japanese as a Foreign Language*. Bristol: Multilingual Matters.
- Daikuhara, M. (1986) A Study of Compliments from a Cross-cultural Perspective: Japanese vs. American English. *Working Papers in Educational Linguistics*, 2(2), pp. 103–134.
- Leech, G.N. (2016) *Principles of Pragmatics*. New York: Routledge.
- Maynard, S. K. (1986) On Back-channel Behavior in Japanese and English Casual Conversation. *Linguistics*, 24, pp. 1079–1108.
- Saito, H. & M. Beecken (1997) An Approach to Instruction of Pragmatic Aspects: Implications of Pragmatic Transfer by American Learners of Japanese. *The Modern Language Journal*, 81, pp. 363–377.
- Trosborg, A. (1995) *Interlanguage Pragmatics: Requests, Complaints and Apologies*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Watanabe, S. (1990) *Framing in American and Japanese Group Discussions*. Unpublished

doctoral dissertation. Georgetown University.

Watanabe, S. (1993) Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions.

In Tannen D. (ed.), *Framing in Discourse*. pp. 176–209. New York: Oxford University Press.

(たかみや ゆみ・アラバマ大学バーミングハム校)